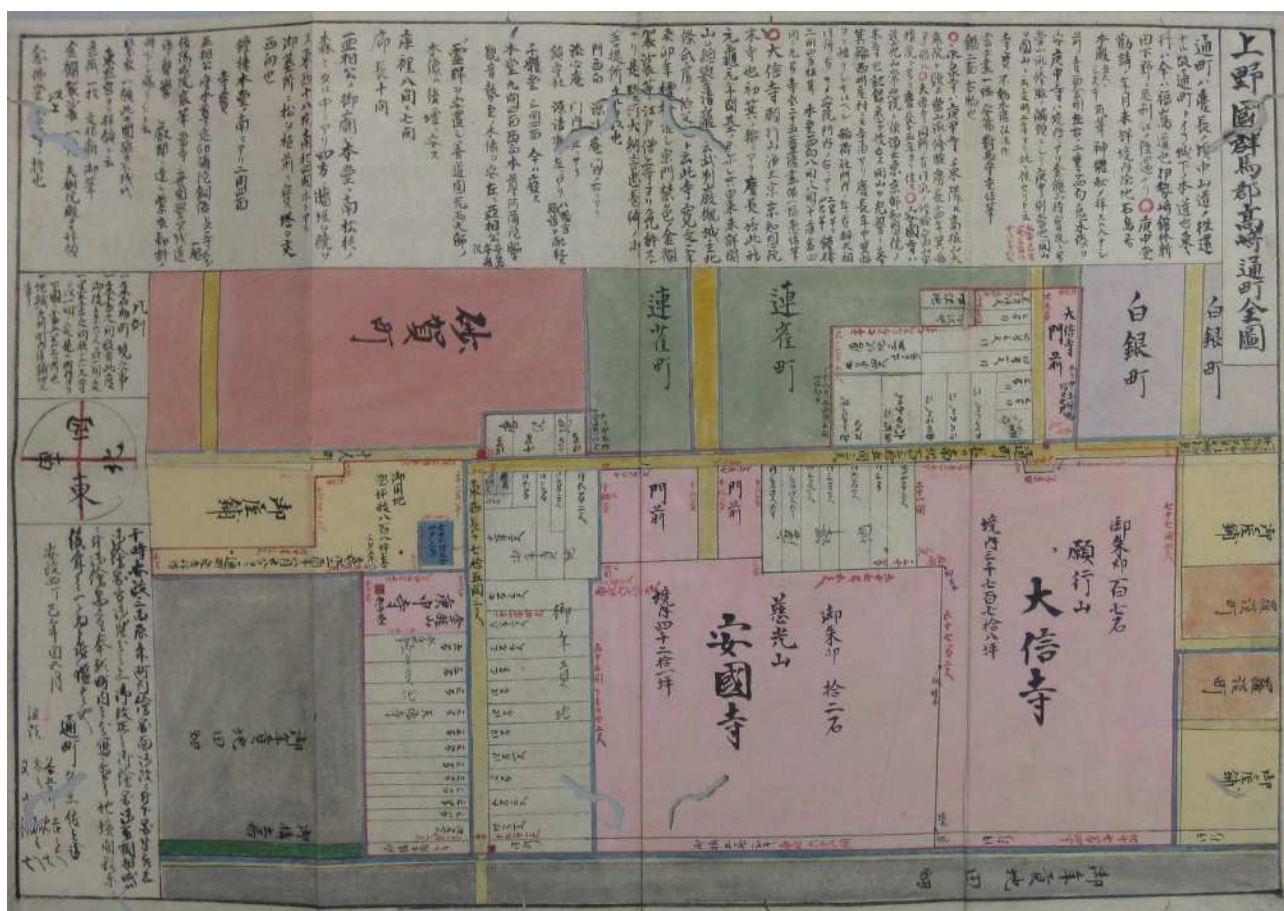


市史のひろば

第3号

(令和5年2月)



上野国群馬郡高崎通町絵図（高崎市立中央図書館蔵）

《 目 次 》

- 高崎藩の外国公館警衛と江戸市中取締（堤 克政）… 2
- 高崎城跡－築城期の遺構を探る（清水 豊）… 4
- 執筆者紹介・表紙写真解説・奥付… 6

堤さんは、高崎史志の会の中心として講演会・勉強会など様々な活動を活発に行うとともに高崎の郷土史研究を進められ、その功績から平成 30 年度の高崎市文化賞を受賞されています。また、近年では『天狗党事件と高崎藩』（上毛新聞社・2020）を刊行されました。

今回は、ご先祖である堤金之丞の史料も交え、幕末期の高崎藩の動向についてご寄稿いただきました。開国後の情勢の中で高崎藩が果たした役割の一端が紹介されています。

高崎藩の外国公館警衛と江戸市中取締

堤 克政

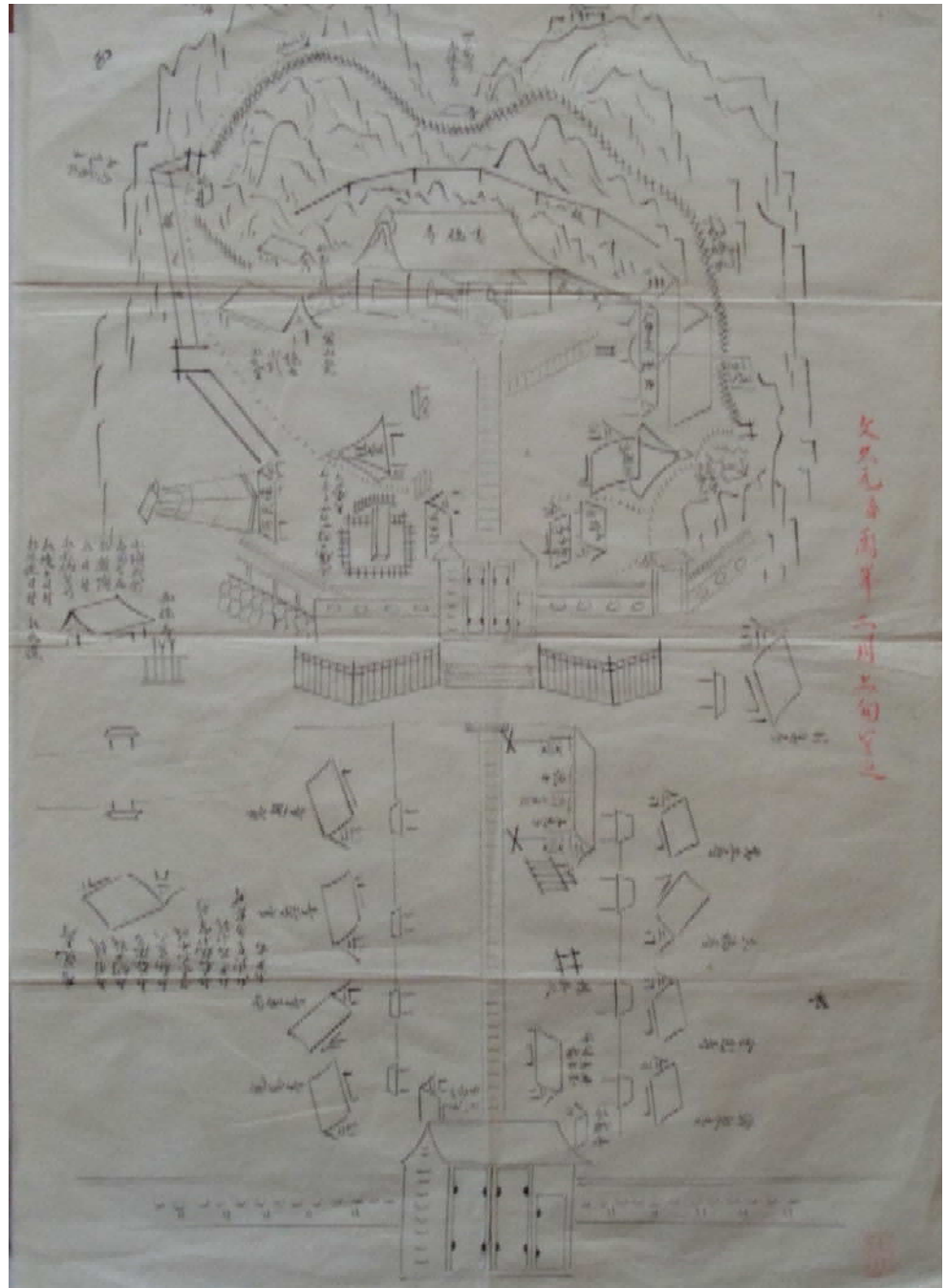
安政元年（1854）3 月、幕府は日米和親条約を締結し近代欧米国家に対し開国、同 5 年には修好通商条約を締結すると、近代国家の外交関係として公使を首都に駐在させることになる。外国公使の江戸駐在については幕府内においても諸外国とも議論があったが、結局アメリカ・イギリス・フランスが江戸に外国公館を設置する。そのため幕府は彼らが滞在する宿舎を手配する必要が生じ、多人数を収容し警備にも適し、かつ格式ある施設として大寺院を充てた。即ちアメリカには麻布の善福寺、イギリスには高輪の東善寺、フランスには三田の済海寺、オランダには高輪の長応寺である。

外国公館の設置に踏み切った幕府だが、江戸市中にも攘夷を唱えるテロが横行し、アメリカ公使ハリスの秘書ヒュースケンやイギリス公使オールコックの日本人通訳など外国人やその関係者の殺傷事件が相次ぎ、外国から警備の不備を非難され幕府は警備体制を増強する必要に迫られた。まず講武所（幕臣の武術教習機関）から武芸の優れた者を抜擢して外国御用出役・別手組を組織し 300 人を配置する一方、諸藩に公館警備を担当させることになった。命じられた藩は万延元年（1860）から元治元年（1864）の間の実質 3 年間に 30 藩が数カ月単位で交代警備に当たっている。3 万石から 10 万石の中堅規模の藩が命じられたことは警備人員のうえで当然であるが、命令されやすそうな藩が就いている。藩主が 10 代の若年、前藩主が隠居して間もない、あるいは幕閣内で失脚した藩といったところで、高崎藩も藩主輝聲公が弱冠 13 歳の所為であろう。

高崎藩の幕末から明治にかけての出来事を記録した『高崎藩近世史略』に、「文久元年（1861）辛酉（二月十九日文久に改元）正月十三日更に麻布善福寺在留の米人警衛を命ぜられる。因って用人を総督と為し士卒数十人を該寺に派出す。すなわち屯営を處處に設け、特に門戸出入の者を検査し昼夜内外を巡邏す。家老隔日に之を巡視す。二月十一日に至り之を免ぜられる」また、「文久二年壬戌五月三日伊皿子長応寺在留の蘭人警衛を命じられる。全て米人警衛の時の如し。九月四日蘭人警衛を免ぜられる」とある。

高崎藩はそれまで担当していた島原藩（万延元年 11 月 21 日就任）に代わってアメリカ公使館の警衛を命じられた。任務にあたった高崎藩目付堤金之丞克寛が「文久元辛酉年二月上旬写之」し「克」の印を押した善福寺の絵図（写真参照）が残っ

ている。大寺院の善福寺には、今日まで続いている専光寺・光善寺・善光寺・善通寺・金蔵寺・真福寺・善正寺のほか、行善寺・西福寺・西臺寺・浄泉寺と多くの塔頭が建ち並び、その奥に一段高く善福寺の境内が石垣組みに板塀で囲まれている。その中には本堂の北側庫裡に垂墨利加人宿舎が置かれ、幕府側の外国方、先手組や講武所の警護役が配された建物、外国方見張や目付控處も見られる。警護とは関係な



いが江戸時代からの名物で親鸞上人所縁の「サカサイチョウ」の大木も描かれている。

高崎藩は、塔頭の西福寺に留守居役と者頭、目付、小頭武者ら番方が、専光寺には御用役をはじめ役方の面々が宿直したようで役名が列記されている。善福寺御門の前には塔頭が建ち並び、入口部分には門が、出入りする者を点検警備する外国方手付と見張の建物が描かれている。

アメリカ公使館の警衛は約1カ月で済んだが、翌年の5月にはオランダ総領事の江戸公館高輪伊皿子の長応寺の警衛を命じられる。これも4カ月で御役目御免となったものの、休む間もなく今度は江戸市中の取締を命じられた。

「文久三年癸亥四月四日市中取締を命ぜられる。すなわち諸士徒士足輕を以て組織する所の二隊交々昼夜市街を巡邏する。十四日夕老中急使を馳せて本藩重役二人

を西城に召して以て密旨を告ぐ。即ち用人三人各々一隊の士卒を率い直ちに新徴組員を馬喰町に圍（カコ）む。暴挙の兆し有るも屢之を説諭する。翌日早天岡田誓等十有七人一書を呈（アラワ）して以て其の志を陳ぶ。すなわち評定所に護送する。独り石坂周造等猶未だ屈服せず。然れども談論稍（ヨウヤク）整い遂に復之を護送する。初め新徴組攘夷の軍資と称して金を市中の富豪に募り、将に横浜在留の外国人を襲撃せんとす。此に至って本藩旨を奉じて之を評定所に護送する。留守居役菅谷清允最も尽力せり。此の時に当って庄内藩等も亦旨を奉じて本所三笠町の新徴組員を評定所に護送する」と役目遂行の一端が『高崎藩近世史略』に記されている。

捕縛した新徴組頭取石坂周造は、15代将軍徳川慶喜の信頼厚い幕臣高橋泥舟の妹が妻で、泥舟の義弟は江戸無血開城の真の立役者山岡鉄舟である。つまり義兄弟が江戸を守ることに命を懸けていた幕臣で、勝海舟と共に「幕末の三舟」と称される人物。一方石坂は無頼の徒の首謀者という複雑な関係で、従来の常識からは理解し難く、警衛や取締は頭を悩ましたに違いない。藩としても、中央の政治社会情勢に対応するため江戸定府の人数を増やさざるを得ず、経済的にも組織的にも負担であったろう。

日本中を襲った開国に伴う荒波に地方の高崎も巻き込まれていた。



清水さんは、文化財保護課で長年発掘調査に携わっています。今号では、高崎城跡の発掘調査成果の一部を利用してご寄稿いただきました。

高崎城跡は、現在では乾櫓や三ノ丸の土塁と堀などが残るのみとなっていますが、発掘調査の成果や櫻井一雄家文書をはじめとする史料からその姿を伺い知ることができます。今回は、その中から二ノ丸堀と本丸堀をつなぐ溝と障子堀についてご紹介いただきました。このうち堀をつなぐ溝については、本文にもある通り高崎市総合保健センター・高崎市立中央図書館の前に移築されていますので、図書館へ来館された際に見学してみたいかがでしょうか。

高崎城跡－築城期の遺構を探る

清水 豊

高崎城は、徳川家康の関東移封とともに上野国（今の群馬県域）へ入国した井伊直政が、箕輪城から拠点を移すにあたり、和田城の跡地を選定したことに始まる。入城したのは今から425年前の慶長3年（1598）10月とされる。豊臣秀吉の死去からわずか2か月後の出来事であった。築城工事は藩主交替による中断をはさみ元禄5年（1692）までに概ね整備された（その時の城主は7代安藤重博）。城内の本格的な発掘調査は昭和50年代から始まり、現在までに25回調査されている。今回は、そのなかでも築城期段階の年代と推定される2つの遺構を紹介したい。いずれも、平成20年度に実施した高崎市総合保健センター・高崎市立中央図書館建設（高松町、以下「総合保健センター」と略す）に伴う発掘調査で見つかった。

堀をつなぐ溝 その幅は約 7m、深さ 1.8m 前後で、二ノ丸堀から本丸堀をつなぐようにある。用途は、オーバーフローした二の丸堀の水を、本丸堀へと流す仕掛けで、調査では大きく 3 つの時期（素掘り→石垣水路→石樋の暗渠の順）をたどる変遷を認めた。つくられた年代は、埋め土のなかに含まれる浅間山起源の軽石層（浅間 A 軽石）との関係から、2 期水路は天明 3 年（1783）以前には埋没していて、遅くとも天明 6 年（1786）までの間に樋を設置し、文化 4 年（1867）以前には「石樋」が用いられた可能性があるという。それでは、「1 期の素掘りの溝→2 期の石垣の水路」はいつ掘られたのだろうか。それを知る手掛かりは、溝の壁を構成する石組の中から出土した遺物が鍵となる（石組をつくる際に紛れたもので、それ以前に存在していた物である）。その遺物は 10 点の瀬戸美濃焼片と決して多いとは言えないが、1590 年代から 17 世紀前半（～1650 年）までの時期におさまる。ということは、初代城主井伊氏から 6 代城主安藤氏の時代に収まり、概ね築城段階に位置づけることができそう。また、樋の変遷から、その保守管理は 19 世紀まで継続的に行われ、途中には詰まりにくくする仕様に変更するなど、施設の重要性を知ることができる。さて、調査で確認した石組の樋は、高崎城を理解するうえで貴重な資料であることから、現在は総合保健センター正面入り口の左（南）側に移築保存され、見学することができる。

障子堀 同じく総合保健センター建設に伴う調査で発見された堀である。高崎城絵図と照合すると、二ノ丸に伴う堀と分かる。その規模は幅 19.8m（11 間）、最大で 4.2m の深さがある。堀底の幅は 13.8m だが、格子状に一段深く掘り下げられた部分がある。これを「障子堀」とよび、外敵の侵入に対する防御の仕掛け（「水堀」で、濁った堀内では、堀底は見えない。いったん入り込むと足を取られやすい。）と理解される。高崎城では二ノ丸に伴う堀に相当する部分で現在までに 3 か所で発見され、場所によって異なるタイプを施工しているようだ。高崎城の建築物等を記録した史料（『桜井一雄家文書』）にも、「ほりせうじ（堀障子）」と記される。さて同様な障子堀を見てみると、小田原北条氏が整備した山中城（静岡県）や小田原城にみることができる。また、大坂城三ノ丸でも 1598 年の段階で作られた堀の仕掛けとして確認さ



写真 1 空から見た障子堀（三の丸遺跡）

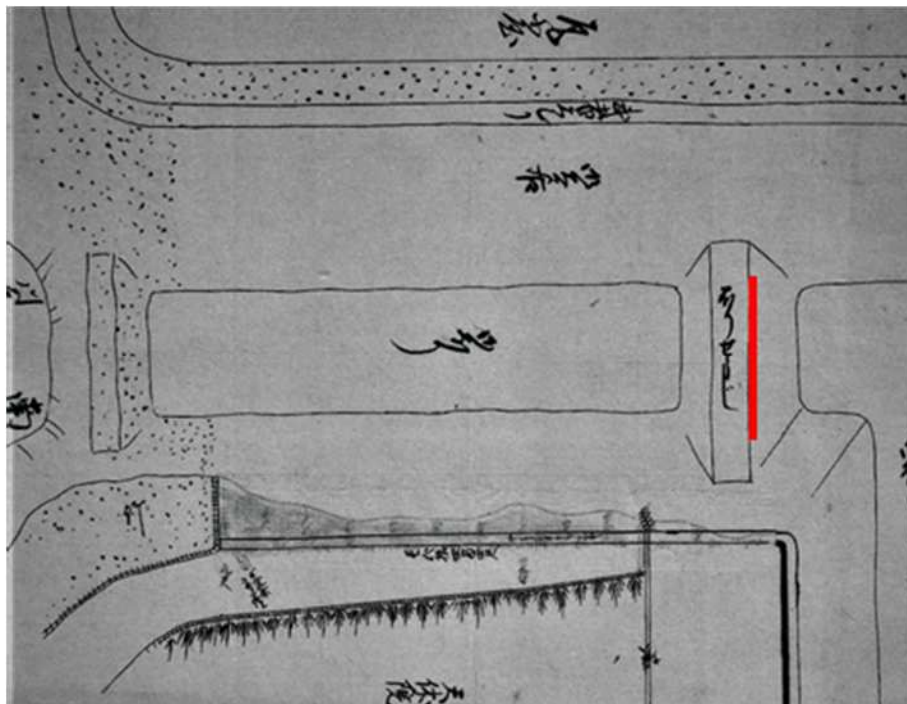


写真2 「ほりせうじ」『桜井家一雄文書』（部分）
傍線は筆者による

れている。高崎城の障子堀は、堀からの出土品から年代を絞り込むことは残念ながらできない。だが、現段階で築城期でも初期段階の造作と推定しておき、今後の新たな発見に期待したい。

このように、発掘調査で得られた資料を丹念に分析し、高崎城絵図や文献史料と照らし合わせるこ

とにより、城の構造・変遷に加え、城内の暮らしぶりを復元することができる。



執筆者紹介

堤 克政 高崎史志の会理事

清水 豊 高崎市教育委員会文化財保護課

表紙写真解説 上野国群馬郡高崎通町絵図〔安政4年（1857）／26.5×38.5cm〕

高崎城下通町の絵図。安政4年（1857）閏5月写。上段には通町の地誌が記され、絵図左下には「安政3年に行われた町内絵図面の御改に際し、御絵図方に願って後年の亀鑑（手本、模範）とすべく町内の分を写置いた」とある。

市史のひろば 第3号

発行日 令和5年（2023）2月15日

編集・発行 高崎市立中央図書館

〒370-0829 高崎市高松町5-28

TEL 027-322-7919／FAX 027-324-3423

E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています（<https://lib.city.takasaki.gunma.jp/>）。